

グローバルな交流を深め、 発展しよう



たなか こうじ
田中 幸二
元電気学会会長

現在は、日本にとって大事な転換期の時期ではないかと思う。

目標がかなり明確だった高度経済成長期と異なり、将来の予測が難しく、変化も激しい世の中になってきている。また、経済成長と社会課題の解決を両立させることが重要になってきている。そして、その社会課題は複雑化し、国内のみならず気候変動やグローバル化にともなう地球規模の大きな課題に真剣に取り組んでいかなければならず、時間的な猶予もない。さらにコロナ禍において、パンデミック対応やデジタル化の遅れなどの課題も顕著になってきた。こういう状況の中で、日本の現在のポジションは、例えばIMD (International Institute for Management Development: スイスのビジネススクール) が毎年公表している世界競争力年鑑において64か国の中で中位にあり、1990年代からじりじり後退してきている。グローバルな潮流を含めて世の中の変化に十分に対応できていない結果とも言える。

日本は、海に囲まれ、欧米のように簡単に他の国々と行き来しにくい地理的条件の面でも、また、大量生産、大量消費の高度経済成長を可能とし、良い点でもある協調性や均等な教育の点でも同質化しやすく、組織は蛸壺化しやすい。黒船来航から始まる明治維新のような革新的な大きな出来事があると一気に外部との交流が進むが、その展開がある程度進んで成功すると、成功体験に安住してしまう傾向があるのではないだろうか？

しかし、これからの世界は冒頭示したような状況は変わらず、変化に十分に対応し、さらに変化をリードしていくための俯瞰的なものの見方、イノベーション力、課題解決力が求められる。それらを生み出す基盤の一つとして、多様性が重要であろう。これは、一人一人の個性を伸ばすとともに、さまざまな分野や文化と積極的に交流する場をつくり、新たな気づきから良いところを取り入れて、さらに高めていくことにつながる。従来の枠組みを超えて、進歩するためには重要な概念である。

スポーツは試合で優劣が明確に決まるので、例えば、世界の中で相対的に弱くなってきた種目では、強豪国か

ら指導者やコーチを招いたり、海外のチームに参加するなどして強豪国の良いところを学ぶ。強豪国の良いところを学ぶだけでは彼らを超えられないが、もともとあった自らの強みにそれらを掛け合わせ、さらに工夫し、進化させると強豪国をも超えられるようになる。従来の自国の強みの強化だけでは、限界があることが多い。

電気工学は、現代においてもベーシックで応用の効く学問であり、また、他の分野と融合して展開しやすい学問と思う。電気工学そのものもそうだが、電気工学を学ぶことにより、応用が効く基本的な考えを学ぶことができているような気がする。自らの専門以外の他の分野の工学を新たに学ぶ場合でも、電気工学を学んだ人のほうが学ぶ障壁が少ない傾向にあるように見える。電気工学では見えやすい事象だけでなく、無効電力などの見えにくい事象も学んでいるなどのメリットがあるからかもしれない。また、現代社会が電気、および電気が基本となる技術、製品、産業からたくさんの恩恵を受けているように、現代においてもカバーする範囲が広い学問であることもあろう。

しかし、現在、将来を含めて、電気工学のみで社会課題の解決は難しく、イノベーションにも限界があろう。他の分野と積極的に協創していくことにより、それは可能になる。その場合、前述のように他の分野とつながりやすい電気工学の強みを活かすことが出来る。さらに、複雑化した社会課題の解決には理系の技術だけでなく、人文科学や社会科学などの文系の知見や知識が不可欠である。そのような協創の枠組みの中で、電気学会と電気を学んだ関係者が、地球規模の社会課題の解決、およびイノベーションの先導役としてこれからも発展して欲しいと思う。そのためには、論文などの学会のコアの部分をさらに強化するとともに、多様性の観点から、グローバルなアンテナを高くして我々のポジションを把握し、世界の有力な学会と積極的に交流し、彼らの良い点も取り入れて進化していくことが一つの大きな力になると思う。今後の展開と発展に大いに期待しています。